

主論文の要約

論文題目：

乳児との“かかわり”における母親の主観性 ―子どもの発達との関連に着目して―

氏名：上嶋菜摘

要約

本研究は、母子相互作用の母親の側に焦点をあてて、母親の主観性の観点から乳幼児期の子どもへのかかわりを支えるための示唆を得ることを目的とした。

乳児に対する母親のかかわりに影響を与えていると考えられる要因については、発達心理学や乳幼児精神医学といったそれぞれの立場や観点から報告され、子ども発達や母親のかかわりを理解するために役立てられてきた。例えば、母親が言語的コミュニケーションを開始する前の子どもとの間で、子どもが出すさまざまな情緒的サインを手がかりにかかわっていること (**Sorce & Emde, 1983**) や、子どもへのかかわりの背景に母親自身の主観性が把握されること (**鯨岡, 1989**) が指摘されてきた。しかしながら、これらは研究者や観察者により指摘されてきたものであり、母親自身による報告というものは見当たらない。つまり、子どもにかかわる際に母親自身にとって認識可能な手がかりは何なのかという問題は残されたままであるといえる。

このような問題意識について、第 I 章では、従来の乳児期の子どもと母親の母子相互作用研究を概観し、子どもへのかかわりにおいて母親による子どもの心的状態の把握が重視されてきたという背景について整理を行った。また、母親から乳児へなされる“かかわり”の背景には、母親自身の様々な意図や感情が関与していることについて概観した。これらを踏まえ、子どもへのかかわりを検討する上では、母親による子どもの状態の読み取りのみでは不十分であり、母親に喚起された主観性についても同時に扱う必要があることを指摘した。母親の主観性を検討可能とするために、乳児の心的状態の把握について用いられてきた従来の手法 (**Emde, Osofsky, & Butterfield, 1993; Meins, 1997; Oppenheim & Koren-Karie, 2002**) を参考にして、乳児の要因を統制するためにすべての母親に共通の刺激を提示すること、および、乳児にかかわる際に何に着目したのかを想起しやすいように乳児の死蔵刺激を用いる必要性について整理し、新たに面接法を用いることを提案した。

第 II 章では、母親が乳児とのかかわりにおいて何に着目することができているのかについて、実験的手法を用いて多角的な視点から検討を行った。具体的には、母親に対して乳児が映っている映像を素材として提示し、そこに映っている乳児に対してどのようにかわるのかを想起させ、続いてどうしてそのようにかわるのかについて理由を尋ねるといった半構造化面接を行った。そのために、母親へ提示する刺激として用いるビデオクリップを作成し、続いて、作成した刺激を複数の母親に提示して、乳児に対するかかわりとその手がかりを回答させる半構

造化面接を行った。半構造化面接によって得られた面接記録を質的に分析した結果から、乳児の心的状態や乳児の行動といった乳児に関する内容に加えて、母親自身の主観性に関する内容も抽出された。さらに、母親の主観性に関する回答をKJ法(川喜田, 1967;1970)によってボトムアップにカテゴリー化を行ったところ、母親の主観性がどのような質的要素から構成されるのかという問いについて、母親が感じ取った乳児の状態と関係が深い内容と、目の前の乳児の状態にかかわらず母親自身の感情や主体性が強く表れていた内容まで様々であることが示された。具体的には、「乳児の心的状態への働きかけ」「母親自身の感情」「乳児への期待」「母親希求」「共有・共感」の5つの枠組みが示された(Figure1)。

これまでの研究では、研究者や関与観察者の立場からその存在や母子相互作用への関与が指摘されるにとどまり(Stern, 1985;青木ら, 1999;鯨岡,1989;1999), 母親の認識という観点からの実証的研究は行われてこなかった。本研究の結果からは、これまで関与観察者による把握や記述によって示されるにとどまってきた母親の主観性(鯨岡, 1986;鯨岡ら, 1989)を、母親の言語報告によって実証的に裏づけるものであったといえよう。そして、母親が、客観的に観察可能な乳児の行動や乳児から感じ取った心的状態に応じているのみではなく、母親自身が自らの主観性を関与させながら主体的にかかわっていることが示された。つまり、母親が子どもの表出行動に気づき、心的状態を感じ取るという側面と乳児へのかかわりという行動の側面との間には、母親の主観性が介在していることが実証的に示された。

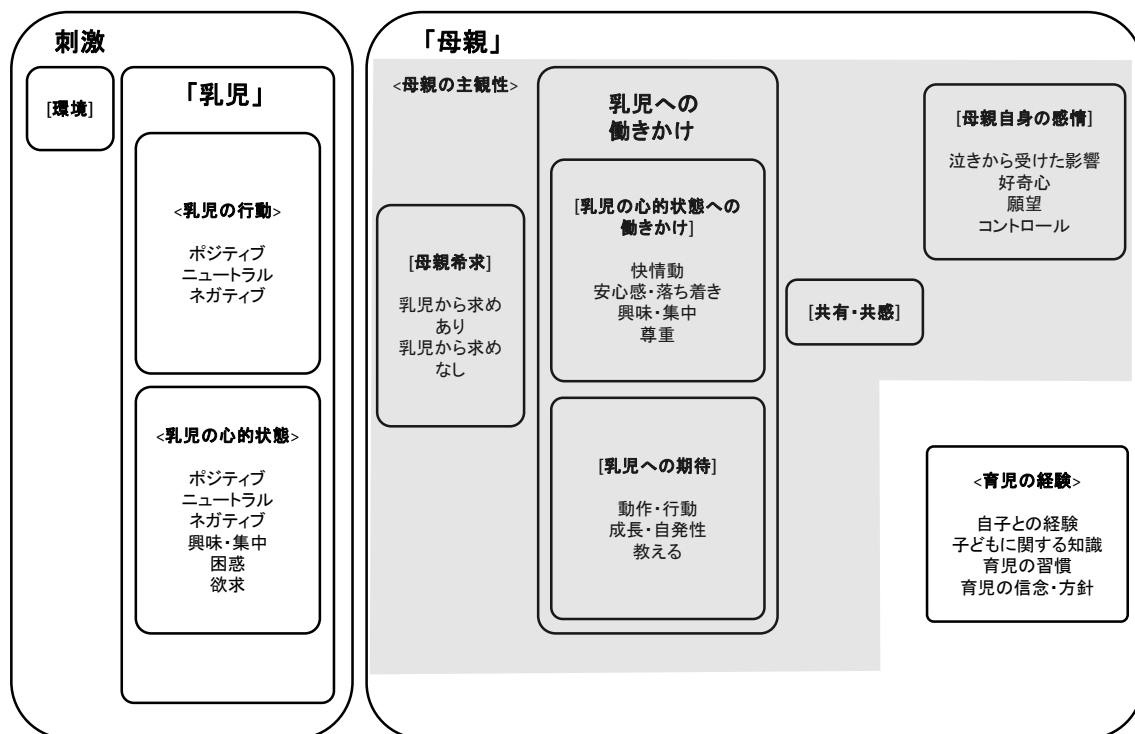


Figure1 生成されたカテゴリー

これまでの研究では、研究者や関与観察者の立場からその存在や母子相互作用への関与が指摘されるにとどまり(Stern, 1985;青木ら, 1999;鯨岡,1989;1999), 母親の認識という観点からの実証的研究は行われてこなかった。本研究の結果からは、これまで関与観察者による把握や記述によって示されるにとどまってきた母親の主観性(鯨岡, 1986;鯨岡ら, 1989)を、母親の言語報告によって実証的に裏づけるものであったといえよう。そして、母親が、客観的に観察可能な乳児の行動や乳児から感じ取った心的状態に応じているのみではなく、母親自身が自らの主観性を関与させながら主体的にかかわっていることが示された。つまり、母親が子どもの表出行動に気づき、心的状態を感じ取るという側面と乳児へのかかわりという行動の側面との間には、母親の主観性が介在していることが実証的に示された。

続いて、第Ⅲ章では母親の認識という観点から、子どもへのかかわりの中で母親に喚起される主観性および乳児の心的状態を把握する方法について検討を行った。まず、研究協力者に対して自子と見知らぬ乳児の両方の映像を提示して、第Ⅱ章と同様の半構造化面接を行った。その結果、子どもへのかかわりの中で母親が自身のかかわりと関係づけて捉えることができていた要因が共通の映像に対する回答に反映されることが確認された。よって、実験的手法を用いて母親の主観性および乳児の心的状態を捉えことができていると考えられた。

第Ⅳ章では、第Ⅲ章で妥当性が確認された実験的手法を用いて、母親の主観性と子どもの発達との関連について検討を行った。異なる発達の乳児の代表として、乳児の側に情動や欲求、思考といった心的状態が分化し、乳児が自身の主観的世界を他社と共有したりできるようになったり、他者の意図を認識してそれに応じた行動をとったりできるようになるという第二次主観性を獲得するとされる9ヶ月児と、それより以前の、乳児の心的状態があいまいである3ヶ月児を用いることとした。これらの異なる月齢の乳児の映像を提示し、半構造化面接を行った。

半構造化面接で得られた回答を第Ⅱ章で示された「乳児」および「母親の主観性」の枠組みにそって検討した。その結果、母親が「乳児」のどのような側面に着目しやすいのかということ、母親に喚起されやすい「母親の主観性」の特徴は、乳児の月齢によって異なることが示された。

つまり、母親は、3ヶ月児に対しては、[乳児の行動]に着目しやすく、9ヶ月児に対しては、<乳児の心的状態>に着目しやすかった。また、<母親の主観性>に関しては、3ヶ月児に対しては[母親自身の感情状態]や[母親希求]に関する内容が喚起されやすく、9ヶ月児に対しては、母親が感じ取った[子どもの心的状態に対する働きかけ]を意図した内容や子どもの[成長への期待]を含む内容が喚起されやすいのが特徴であった。これらの結果について、9ヶ月児は3ヶ月児と比べて他者つまり母親の意図や感情状態を感じ取れるようになったために、母親にとっては<乳児の心的状態>により焦点を当ててかかわったり、[乳児の心的状態への働きかけ]に手ごたえがえられるようになったりしたことが母親の回答に表れていたと考えられた。

また第V章では、母子合同面接の事例を通して母親の主観性が子どもへのかかわりおよび子どもの状態の把握とどのように関連しているのかについて検討を行った。事例は、子どもの行動の背景に意図や感情を把握することが困難になりやすい(小林・鯨岡, 2005)といわれる広汎性発達障害と診断され、母親が子ども感情理解や感情コントロールに問題を感じていた事例であった。本事例の検討からも、母親の主観性が、子どもの行動および心的状態の把握や子どもへのかかわりと関連しながら変化しうるものであることが示された。そして、第IV章と同様に、母親が<子どもの行動>に着目しやすい場合には、[母親自身の感情状態]や[母親希求]が喚起されやすいこと、そして、母親が<子どもの心的状態>に着目しやすくなると、[子どもの心的状態への働きかけ]および[成長への期待]が喚起されやすいということが示唆された。さらに、母親が子どもから求められているという母親希求の感覚が、母親が子どもの心的状態に目を向けられるようになっていく過程において重要であることが示唆された。

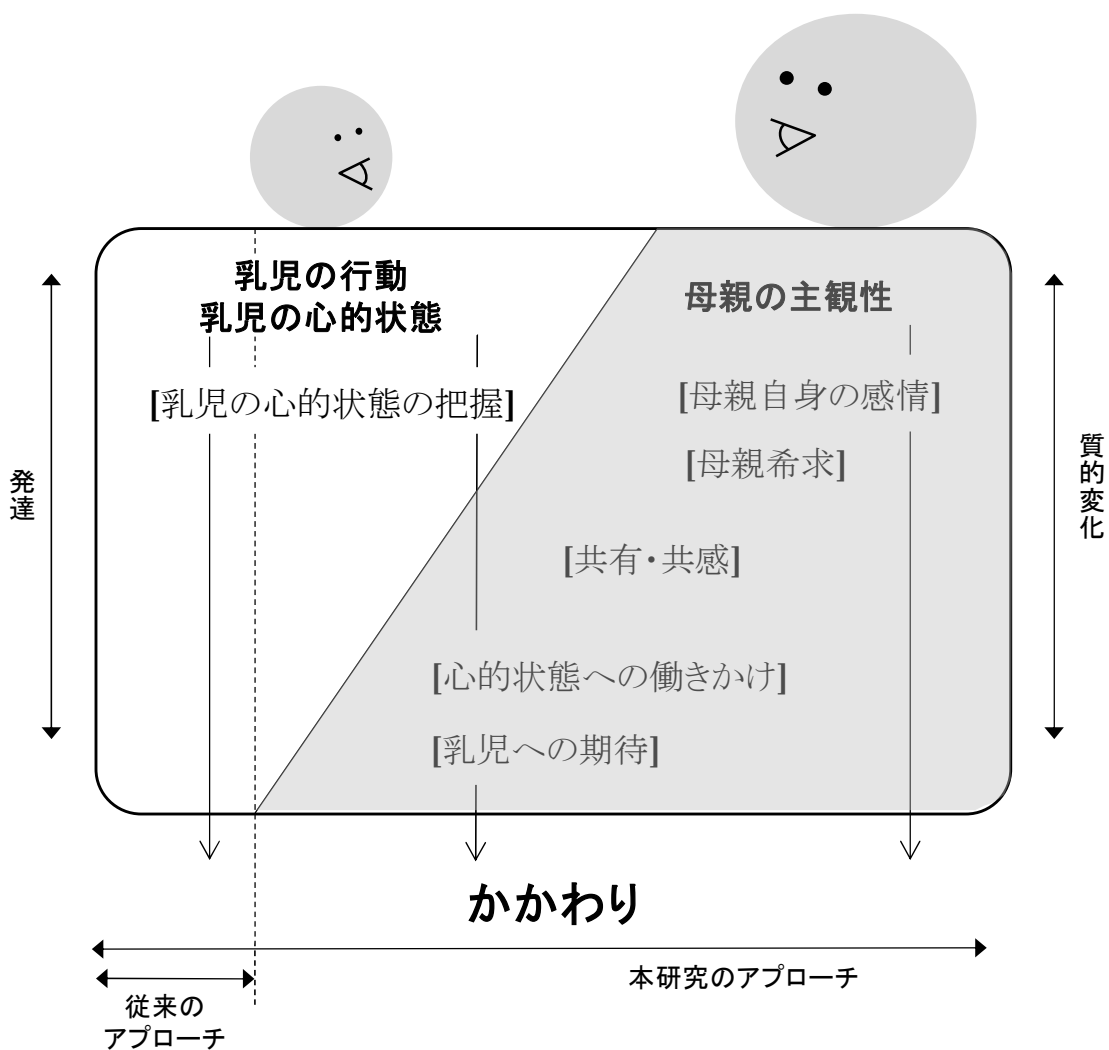


Figure2 本研究の概念図

以上を踏まえ、第VI章では、本研究で得られた知見および臨床的示唆について考察を行った。**Figure2**に示されるように、第II章からは、母親が乳児へのかかわりにおいて着目できている要因について整理を行った。そして、第IV章および第V章からは、母親の主観性が、母親が子どものどのような側面に目を向けやすいのかということ、子どもの発達と関連して変化しうる可能性が示された。

これらの結果について、母親自身による言語報告から母親の主観性に関する回答が抽出されたことから、母親には、乳児とのかかわりが、乳児の行動や乳児の心的状態に応じてのみではなく、自らの主観性を関与させながら主体的にかかわっている存在であると考えられた。

母親の主観性の変化と子どもの発達との関連からは、子どもの側の心的状態が未分化であり、いまの時期や母親が子どもの心的状態を把握することが難しい場合には、乳児から喚起された母親自身の感情や母親が乳児に対してしてあげたいと思っている願望に寄り添うこと、また、母親が乳児から求められていると感じられるような子どもの行動に目をむけられるよう援助することが、子どもへのかかわりを支える上で大切であると考えられた。そして、子どもの側に他者の自身の心的状態を他者に伝えたり、他者の心的状態に関する認識が芽生えたりして、母親が乳児の心的状態に着目しやすくなってきた時期においては、母親が乳児の心的状態をどのようなものとして感じ取り、それに対してどのような意図や思いを関与させて関わっているのか、今後の子どもの成長発達に対してどのような期待を抱いているのかということに注意を向けることが、子どもへのかかわりを支える上で重要になると考えられた。

また、子どもから求められているという感覚に関しては、「母親希求」が回答されるのに続いて母親自身に子どもの心に向けた働きかけが喚起されるようになっていたのが第IV章および第V章において共通した特徴であった。このことから、「母親希求」の感覚が子どもの“心”へ目を向けていくきっかけとなりうる可能性があると考えられた。乳幼児期の子どもに関する支援者は、母親が子どもの心的状態を十分に感じとることが難しい段階において、乳児の情動表出が母親へ向けられたものであると感じられるように支援することが重要であると考えられた。

最後に、第V章の事例が、広汎性発達障害と診断され、感情面でのコミュニケーションに難しさがある子どもとその母親の事例であったことを踏まえると、子どもの側に相手の感情への気づきや自己の心的状態を伝える難しさがあったとしても、母親の主観性という観点から子どもへのかかわりが介入できる可能性があるのではないかと考えられた。

以上のように、本研究から得られた知見は、乳幼児期の母子臨床において、母親の側の主観性の観点から母子相互作用へ介入する可能性を含んでおり、応用可能性を十分に有していると考えられた。

引用文献

青木紀久代・馬場禮子・出蔵みどり・古川真弓 (1999). 調律行動場面における母親の

主観的体験 心理臨床学研究, 16, 521-528.

Emde, R. N., Osofsky, J. D., & Butterfield, P. M. (1993). *The IFEEL pictures: A new instrument for interpreting emotions*. Connecticut: International Universities Press, Inc.

Emde, R. N., & Sorce, J. (1983). The rewards of infancy: Emotional availability and maternal referencing. *Frontiers of infant psychiatry*, 2, 17-30.

川喜田二郎 (1967). 発想をうながす KJ 法 発想法 中公新書, pp.66-94.

川喜田二郎 (1970). グループ編成を経て A 型図解化まで. 新・発想法 中公新書, pp.48-98. 小林隆二・鯨岡峻 (2005). 自閉症の関係発達臨床. 日本評論社

鯨岡峻 (1986). 母子関係の間主観性の問題 心理学評論, 29, 506-529.

鯨岡峻 (1989). 初期母子関係における間主観性の領域 鯨岡俊 (編訳)・鯨岡和子 (訳) 母と子のあいだ 初期コミュニケーションの発達 ミネルヴァ書房, pp. 277-312.

鯨岡峻 (1998). 関係発達論と原初的コミュニケーション 乳幼児医学・心理学研究, 7, 11-25.

Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*, Hove: Psychology press.

Oppenheim, D., & Koren - Karie, N. (2002). Mothers' insightfulness regarding their children's internal worlds: The capacity underlying secure child-mother relationships. *Infant mental health journal*, 23, 593-605.

Stern, D. N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant*. New York : Basic Books.
(小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳)・神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989). 主観的自己感 1 展望. 乳児の対人世界—理論編— 岩崎学術出版社, pp.146-161.)